タイ奨学金事業と
今後の支援について

TERRA PEOPLE ASSOCIATION

認定NPO法人

地球市民の会

〒840-0822
佐賀市高木町3-10
TEL:0952-24-3334　FAX：0952-26-4922
タイ事業／奨学金担当：山路健造

タイ奨学金約 30 年の歴史に幕

プロジェクトで支援模索へ

認定 NPO 法人地球市民の会が 1990 年から続けてきた、タイにおける奨学金事業。当初は、貧困により中学校に進学できない子どもたちを救済する目的で始めた奨学金事業も、1999 年には、義務教育が小学校の 6 年間から、中学までを含めた 9 年間に。その後も高校生まで拡大するなど、形を変えながら奨学金事業を展開してきました。しかし、タイも中進国の仲間入りをして成熟期を迎え、経済状況も改善してきました。このような状況にあり、私たち日本人が一方的に財政支援をするという形は、「もはや役割を終えたのではないか」という議論が起こり、2016 年秋の会議で、タイでの奨学金事業をやめる方向性を確認しました。

現在、タイ国内で実施する事業は奨学金のみ。しかし、30 年近くにわたり続けてきたタイとの関係を断って良いものだろうか―。このような問題意識をもとに、われわれ地球市民の会タイ事業担当理事とスタッフは 1 月 30 日～2 月 5 日の日程でタイを訪れました。東北部イサーン地域で 30 年あまり続けてきた奨学金事業を評価するとともに、南部のナコーンシータンマラート県も訪れ、新たなプロジェクトの可能性を探ってきました。奨学金のこれまでの歴史とともに、元奨学生や現在の奨学生の状況を知っていただき、奨学金ではなく違う方法でタイを支援する地球市民の会の活動にご賛同いただければと思います。

【現在奨学金を受給するノンハーン校生たち】

地球市民の会タイ事業のあゆみ	
1986 年秋	ジャナロン・メキンタラクラ氏との出会い
1987 年 8 月	「日タイ協力事業スタート」
	ワットサーキャオ孤児院（アントン県）事業始まる
1989 年 8 月	クーキャオ中学校事業始まる
	地球市民奨学金
1990 年 5 月	地球市民奨学金制度スタート
	地球市民会館の竣工(ワットサーキャオ孤児院に多目的ホール)
1991 年 2 月	クーキャオ中学校バス寄贈
	ワットサーキャオ孤児院女子寮建設、バス寄贈、汚水処理事業
	ドゥアン・プラティープ財団バス寄贈
1991 年 10 月	「地球子どもサミット・イン・ジャパン」でワットサーキャオ孤児院とクーキャオ校の生徒 25 人が来佐
1992 年 2 月	「第 3 回地球隊‘92」(タイ・ベトナム・カンボジア訪問)
1992 年 8 月	「第 7 回地球ユースサミット」(タイ訪問)
	山岳民族支援のテラトピア計画(チェンマイ県メート―村)
	書き損じはがき回収益金で食糧増産に寄与したとして、チェンライ県生涯教育センターが「ノルマ賞」授賞
1993 年 2 月	テラトピア計画(チェンマイ県メート―村)小学校校舎・寄宿舎建設
1993 年 7 月	土地購入の円高差損で寄付金 110 万円にマイナス差額
1993 年 8 月	「第 8 回地球ユースサミット」(タイ訪問)
1994 年 2 月	「第 4 回地球隊‘94」(タイ訪問)
1994 年 3 月	「第 2 回里親ツアー」(タイ訪問)
1994 年 7 月	メートー小学校校舎落成
	ワットサーキャオ孤児院男子寮建設
1994 年 8 月	「第 9 回地球ユースサミット」(ベトナム、タイ訪問)

1995年8月	「第3回里親ツアー」(タイ訪問)
1995年10月	ワットサーキャオ孤児院水害緊急支援
	テラトピア計画(チェンマイ県メート―村)公用車両購入
1996年2月	「地球隊‘95」(タイ訪問)
1996年3月	「第4回里親ツアー」(タイ訪問)
1996年5月	タイ国研修ツアー
1996年11月	「第5回里親ツアー」(タイ訪問)
1998年6月	クーキャオ中学校水供給プロジェクト完成
1998年8月	「地球隊‘98」(タイ・スリランカ)
	地球市民奨学金(タイ・ボーゲウ中学校・高校)
2001年3月	「第6回里親ツアー」(タイ訪問)
2008年ごろ	徐々に奨学金の規模を縮小
2009年11月	ウドンタニ県で教育環境調査
2010年6月	教育支援のためのチャリティショップ「ばーん・たわん」(タイ語で『太陽の家』)がオープン
2010年11月	ばーん・たわん支援先を訪問
2011年8月	クーキャオ校訪問ツアー
2011年12月	ボーゲウ校、クーキャオ校訪問ツアー
2012年4月	ボーゲウ校での奨学金を終了し、同校に精米機を設置(教育環境改善プロジェクト)
2012年12月	カラシン県・ジョムシー小学校に図書館を建設
2013年度	クーキャオ校での地球市民奨学金の新規募集停止を決定。 同時に同じウドンタニ県ノンハーン校で新・地球市民奨学金を開始
2013年12月	図書館建設地でワークショップ
2015年12月	絵本読み聞かせの現地 NGO マレットファンと共催でタイの子どもの未来を考えるツアー
2017年1月	ノンハーン校、クーキャオ校で聞き取り調査を実施し、新・地球市民奨学金制度の終了を決定。同時に南部ナコーンシータンマラート県でのプロジェクトの可能性を調査

◆ソーシャルワーカーの一言で「タイ病患者」続出

「日本人はバナナか！」

それまで国際交流を中心に進めてきた地球市民の会が、国際協力の分野にも足を踏み入れたのは、あるタイ人ソーシャルワーカーの一言でした。ジャナロン・メキンタラクラ氏（故人）。1986年、アジア・シンポジウムで来日していたジャナロン氏は、地球市民の会創設者の古賀武夫（故人）たち九州人の前で、このような言葉を放ったそうです。「あなたたち日本人はアジア人であるにも関わらず、アジアの方は向かずに欧米の方ばかり見ている」。つまりは、黄色人種であるはずの日本人も、その腹の中は、白人種であるz欧米人のようである、という意味です。

当時の地球市民の会メンバーはこの言葉にショックを受け、翌87年にタイへのスタディツアーへと出かけて行ったのでした。

その先でメンバーたちが見たのは、経済的な貧富の差が生み出す教育の惨状でした。当時のタイの一人あたりの名目GDP（国内総生産）は840USドルと、同年の日本（1万6893USドル）の20分の一以下。当時、義務教育は小学校までで、中学校に進学できない子どもたちも多くいました。戦後復興を遂げた日本とのあまりの格差。一方で、子どもたちは屈託のない笑顔、心のおおらかさを見せます。「真の豊かさとは何だろうか」と当時、多くのメンバーがその魅力に取りつかれる“タイ病患者”を生んでいきました。

「アジアの一員としてできることを」―。この言葉を胸に、地球市民の会はこの年から「日タイ協力事業」を始めるのです。これこそ地球市民の会が、九州で最も古い国際協力団体へと舵を切ったきっかけでした。

当初は孤児院の建設などを進めましたが、1990年から始めたのが、「地球市民奨学金制度」です。当初は、東北部・ウドンタニ県クーキャオ校でスタート。1998年度からは、支給先として、カラシン県ボーゲウ校も追加されました。

◆「初等教育の機会与える」から「貧困の連鎖断つ」奨学金の形へ

しかし、「最低限の教育の機会を」をコンセプトに続けてきた地球市民の会の奨学金制度にも変化が訪れます。それは、1999年のタイの義務教育の拡大です。中学3年生まで広げられたことで、多くのタイ人が中

学へと進学することが可能になってきました。

これに伴い、奨学金制度も、2008 年度ごろから徐々に縮小。2016 年度の卒業生への支給を持って、地球市民奨学金は幕を下ろしました。

一方で、タイの支援は並行して継続。チャリティショップ「ばーん・たわん」の売上金などを活用し、2012 年には「教育環境改善プロジェクト」として、ボーゲウ校に精米機を設置。精米機の村人の使用料やおコメを精米して販売する益金などで自力で奨学金支給を目指す仕組み作りを行いました。また 2012～13 年にかけては、カラシン県のジョムシー小学校において、図書館建設プロジェクトも進めました。

この間、現地の子どもたちを訪ねるさとおやツアー、スタディツアーも随時実施。多くの方に、タイの教育の現状を知ってもらう機会を提供してきました。

その後も支援の形を模索し、2013 年、ずっと奨学金の現地での管理をしてくれていたスラポン先生が移ったウドンタニ県ノンハーン校において、新・地球市民奨学金制度が再スタートするのです。

【長年奨学金事業にご協力いただくスラポン先生】

◆「奨学金がなければ先生にはなれなかった」

タイ東北部ウドンタニ県の中心部から、車を走らせること約 30 分、現在 10 人に奨学金を支給しているノンハーン校があります。中学高校の生徒は、2000 人以上が在籍するそうです。訪れた 1 月 31 日午前 8 時すぎ、子どもたちは校庭に集まり、朝の集会中でした。

「奨学金がなければ、私は先生にはなれていませんでした」。学校では、一人の先生に会いました。彼は今年 40 歳、なんと、中学 1～3 年生のとき、クーキャオ校の生徒で、地球市民の会の奨学金を受けていたとのことでした。元奨学生が学校に通えて夢をかなえ、先生として舞い戻ってきたのでした。

このチェ先生は、本当はクーキャオ校の近くに住んでいたわけではなかったといいます。しかし、当時クーキャオ校に勤めていた先生から奨学金制度のことを聞き、一念発起。1 年時には学校に住み込んでまで、学校に通ったといいます。その後、ラチャパット大学を卒業し、教員の道へ。奥さんも教員で、子どもも 2 人いて、幸せな家庭を築かれているそうです。

【中学生当時の話をしてくれたチェ先生(右 2 人目)】

現在の奨学生たちも集まってくれました。ノンハーン校では計 10 人（高校 2、3 年）に奨学金を渡していますが、行事でバンコクに行っていた 2 人を除く 8 人が来てくれました。

このうち、高校 3 年の 4 人は、既に進学先が決まったそう！　アートデザインや観光マネジメント、社会科の教育、調理やおもてなしを学ぶ大学や職業訓練校に、それぞれ合格していました。さすが！　大学を目指す理由として、「家族を豊かにしたい」「家族の中で大学を卒業した人はいない。家族の地位が上がる」「より良い仕事に就いて土地を買いたい」などを挙げてくれました。

生徒たちに奨学金の使い道を尋ねると、学校へのバス代や文房具、家の電気代など。中には、大学に進学した後のために貯金をしているという人もいました。

聞けば、ノンハーン校は地域でも勉強ができたり、比較的お金があったりする子が集まる進学校でした。タイ事業が始まった当時、タイと日本では 20 倍の差があった一人あたりの名目 GDP も、2016 年には 6 分の一程度（タイ 5662US ドル、日本 37,304US ドル）まで差が縮まるほどの経済成長を遂げたタイ。中には「(奨学金がなくても) 学校には来られたとは思う」と

話す子もいました。

訪問で、地球市民の会の大野博之副理事長は「奨学金の支援が夢の実現に寄与できて、成果も見られてうれしいです」とあいさつ。奨学生たちからはさとおやさんへ「私たちに生きがいを与えてくれてありがとう」などと感謝の言葉も出ました。

【ノンハーン校長に感謝状を渡す大野副理事長(右)】

◆「日雇いの仕事をしなければならなかった」

次に向かったのは、2013 年まで奨学金を渡していたクーキャオ校。

この途中、案内してくれたスラポン先生が車を止めたのは、タイ担当の西村尚子理事が最初にさとおやとなった生徒の家。本人はいませんでしたが、その場で親戚の方から連絡先を伺って電話をし、バンコクの自動車修理工場でチーフになっていること▽実は技能実習制度で 3 年間、日本に行っていたこと▽その間も西村理事と連絡を取りたかったが、連絡先が分からなかったこと▽ずっとさとおやさんのことを考えていたこと—などを話してくれました。また、西村理事とはその場で電話を替わり、十数年ぶりの会話はなんと日本語。少しだけの会話でしたが、元奨学生の成長ぶりを実感することができました。

クーキャオ校では、中学時代に奨学金を受けていた 5 人が高校生として在籍しており、集まってくれました。使い道は、文房具や水道代、学校への交通費などノンハーン校の生徒たちとほぼ同じ。中には「制服は 1 枚支給されるが、着替え用にもう 1 枚は買う必要がありました」と教えてくれた子もいました。

彼女たちには進路の夢を聞きました。学校の先生や警察官、兵士たちを病気やケガから守る警察看護士・・・。「一国の治安に貢献したい」「より良い世の中にしたい」など、日本の高校生からはあまり聞かれない言葉に、われわれ視察団は驚かされました。

【インタビューに答えるクーキャオ校の元奨学生】

一方で、「もし奨学金がなければ」という質問をしました。これに対し、子どもたちから出たのは「日雇いの仕事をしなければならなかった」という現実。朝 7 時半から午後 4 時半までキャッサバ掘りを手伝い、もらえるのは 1 日 250 バーツ（1 バーツ＝約 3 円）。家のタイプライターでの文章打ちは、1 回 10～20 バーツほどにしかならない。それでも、働かなければ、学校に通うことは難しい。そんな彼らに教育の機会を与えられたことは、奨学金事業の成果の一つでしょう。

クーキャオ校のスイックン校長は、実は地球市民の会がタイ事業を始めた約 30 年前、クーキャオ校近くの学校に赴任していたとのこと。地球市民の会がバスを寄贈したり、奨学金を支給したりしていることを「うらやましいと思っていた」と言います。「小さな郡に奨学金をくださったことは忘れません。何千人の学生を代表してお礼を言いたいと思います」と挨拶され、クーキャオ校への訪問は終わりました。

【クーキャオ校で現役で使われる当会寄贈のバス】

◆経済発展から「取り残された子どもたち」も

1990 年の事業開始以降、タイの 3451 人の子どもたちに教育の機会を与えてきた奨学金事業。調査を終えた実感は、やはり「役割を終えた」ということでした。

一方で、まだまだ経済発展から「取り残された子どもたち」がいるのも事実です。ノンハーン校での調査の中では、「古着の靴下を洗って持って行っても喜んでくれるほど、貧しい生活を送る子もいる」と話してくれた先生もいました。これらの貧困の原因は、家族の出稼ぎ。1～4 月にサトウキビ狩りの出稼ぎに行き、そこに子どもを連れて行くので、彼らは教育の機会を奪われてしまっています。

また、新規プロジェクトの調査で訪れた南部ナコーンシータンマラート県では、貧しいとされる地域もご紹介いただきました。

【急な訪問にも私たちを歓迎してくれた児童たち】

海に近いこの集落では 11～2 月の間、海水が上がって道路を封鎖してしまうため、学校は半日だけ。カニの取れるマングローブはあるものの、本来法律では禁止。漁業のほかに町には産業がないため、多くの父母が出稼ぎに行き、子どもたちはおじいちゃんおばあちゃんに育てられます。高校まで通える経済力を持つ家庭は、70 人の生徒のうち 20～30 人程度といいます。

一方で、出稼ぎでも多くの額を稼ぐことはできません。近県のエビ養殖の仕事を手伝っても、一日にもらえるのはタイの最低賃金の 300 バーツ（約 900 円）。訪問時は、PTA のお一人は、17 歳で結婚し、第 1 子を産んだのは 18 歳の時。「早く生んで子どもを労働力として使いたかった」と言います。

経済発展の陰に隠れてしまった、貧困にあえぐ子どもたち。この光景は、タイだけのものでしょうか？いえ、決してそうではありません。これは、6 人に一人が貧困といわれる日本も同じ。決して、海の向こうの話ではありません。

【ほとんどの子の親が出稼ぎで出ているという】

ナコーンシータンマラート県では、タイ人に中学生時代から日本語を教え、福岡の柳川高校へと留学生を輩出する「柳川高校タイ中学校」も見学。同校の運営に携わり、タイ人の日本留学を支援する団体「タイ日人材育成協会」とも意見交換し、今後交流していくことを確認しました。今後、先進国である日本が途上国だったタイを「支援する」というものではなく、タイと日本で手を取り合い、互いの問題を解決していく新たな支援の可能性を感じることができた視察でした。

長年支援を続けてくださったさとおやの皆さまには奨学金という形では関わっていただけないかもしれません。しかし、今後もタイとは変わらず、いや、これまで以上に関係を深め、多くの「地球市民」を育てていきたいと考えています。これまで以上に、地球市民の会をご支援いただきますように、どうぞよろしくお願いします。

【カメラに向かって笑うノンハーン校の奨学生】

タイ奨学金終了に寄せて
～長年のご支援ありがとうございました！～

文責　タイ事業担当理事　西村尚子

～「そこに足を踏み入れた時、昭和の時代に戻ったようにゆったりとした時間が流れる。足に赤土の大地を感じ、夕食の支度の為の薪が焚けるにおい。村の人たちの優しい笑顔にホッとさせられる。

このような貧しい地域でも何とか現金収入を得る工夫をして生活をし、子どもを学校に通わせていると母親は言う。そんな家庭の子どもたちは貧しくても夢を語る。「お医者さんになりたい」と子どもが言うと、スラポン先生が「へー、その成績でどうなんだぁ？！」と、笑ってチャチャをいれる。傍で聞いていたお母さんも豪快に笑う。母親の生きて行く覚悟とその潔さに日本の昭和初期の肝っ玉母さんのイメージが重なる。何よりも心のより所となる安心できる温かい家庭がそこにあった」～

【15 年前に訪れたクーキャオ地区の民家】

これは、奨学金事業を担当してすぐに書いたさとおや通信の文章です。

奨学金事業を始めたころ、塩分を含んだ土壌のために作物も十分に収穫できず、水道も通っていなかったウドンタニ県クーキャオ地区では常に水不足で仕事がなく、多くの父親は出稼ぎに行くしかありませんでした。子どもたちも労働力として働かなければなりません。しかし、奨学金があれば家庭の理解を得て、貧しくても子どもたちは学校に通うことができたのです。

今はどの村にも水道が完備され、ウドンタニ県中心部には大きな工場がいくつも建設され、仕事も増えています。クーキャオ地区も 3 年前に訪れた時は何も無かった道沿いにたくさんの店が連なっていました。東北部の開発速度は目まぐるしく、この地域での当会の奨学金事業は役目を終えたことを実感しました。

【約 10 年前、何もなかったクーキャオの路地】

たくさんの奨学生と接したこの 15 年。遠い日本のさとおやさん方の温かい支援とお気持ちが、どれだけタイの子どもたちの心の支えになってきたかを見てきました。そんな子どもたちが今は家庭を持ち、地域を支え、日本に留学した人もいて、日本を愛してくれています。国際支援から交流へ。今まではタイ東北部を支える事業をしてきた地球市民の会ですが、これからは共に同じ方向を見て、共に歩む時代に入ったと思っています。

今までのタイ東北部奨学金事業に対するご支援に心より感謝を申しあげます。今度はご一緒にタイ東北部に旅行をしてみませんか。

視察時点で進路が判明した高校３年生

	ナッタニー コンケン大学アートデザイン専攻		チャイワーン ウドンタニ教育大学で 社会科教師を目指す
	キンカーン ラチャパット大学ナコーン校 観光マネジメント専攻		ナッタウェー アチリウドン職業訓練校で フード＆ホスピタリティを学ぶ

1990 年度以降のタイ奨学金支給人数

支給開始年度	クーキャオ	クーキャオ	ボーゲウ	ノンハーン	合計
2015				5	
2014	–	–	–	5	
2013	20	1	–	10	31
2012	30	5	–		35
2011	40	10	12		62
2010	50	15	20		85
2009	60	25	30		115
2008	60	25	30		115
2007	60	25	30		115
2006	60	25	30		115
2005	60	25	30		115
2004	60	25	30		115
2003	60	25	30		115
2002	60	15	30		105
2001	60	25	30		115
2000	60	25	31		116
1999	60	25	30		115
1998	55	31	15		101
1997	123	50	–		173
1996	150	50	–		200
1995	230	50	–		280
1994	200	50	–		250
1993	200	50	–		250
1992	200	50	–		250
1991	188	49	–		237
1990	200	51	–		251
	2346	727	378	20	**3451**